

日本仏教学会 2017 年度（第 87 回）学術大会発表要旨

「密教における人間存在」

奥山直司（高野山大学）

羽田野伯猷博士は、論文「Tāntric Buddhism における人間存在」において、『秘密集会タントラ』聖者父子流の生起次第『ピンディークリタ・サーダナ』の構造分析に基づいて、インド後期密教（タントラ仏教）の瞑想・儀礼に顕れた仏（神的存在）と人間との関係を次のようにまとめている（『羽田野伯猷 チベット・インド学集成』第 3 巻 インド篇 I、p.162）。

要するに、有情世間はもとより器世間もまた、本来神的存在でなければならない。人間存在は、仏を父母として、三世の諸仏を本体として入胎し、仏なる栄養に養われて出生するや、身語心の三業において仏と不可分一体であり、その身体の構造機能素材はすべて仏を本性とし、仏を飲食として食する。その死するや法身、中有は受用身、その生まれるや化身として、仏と不可分一体なる神的存在でなければならない。人間は神に奉仕すべき奴隷ではない。仏に額づくのも、人間が自己自身に額づくことなのである。人間存在は神的存在と本質的に円融する。（中略）いわゆる神々は、不了義、世俗、māyā の世界の問題である。内向的な自己探求が問題なのである。かくて、究極の原理として心、菩提心に到達する。一切は菩提心の一心に帰着する。そして、これもまた勝義空・prabhāsvara に帰する。

羽田野博士は、このような理解を「humanism の立場」と呼んでいる。この場合のヒューマニズムとは、宗教における人間尊重の精神、人間性重視の精神を意味するものと考えられる。

聖なる実在と人間との関係は宗教における人間理解の要の一つであり、人間存在は神的存在との関係において規定されると言うことができる。本発表では、上記のような羽田野博士の解釈を糸口として、考察の対象をインド後期密教から密教（真言大乘）一般に広げると共に、近現代の諸家の見解を合わせ検討することを通じて、仏と人間の関係性を軸に、密教から見た人間とは如何なるものであるのか、について検討を加える。

キーワード：密教、人間存在、神的存在